

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13606

研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム障害のある児童における言語コミュニケーションの個人差の検討

研究課題名(英文) Individual differences in language communication in children with Autism Spectrum Disorder

研究代表者

田村 綾菜 (TAMURA, Ayana)

京都大学・こころの未来研究センター・研究員

研究者番号：70617258

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、よりコミュニケーションの上手なASD児者をモデルとした支援方法の開発に向けた端緒として、ASD児における言語コミュニケーションの個人差を明らかにすることを目的とした。発達障害の要支援度評価尺度(Multi-dimensional Scale for PDD and ADHD；MSPA)を用いて特性の分類を試みた結果、ASDの診断のある子どもを3つの群に分類することができた。また、日本版CCC-2「子どものコミュニケーション・チェックリスト」を用いて特性の分類を試みた結果、4つの群に分類することができ、比較的コミュニケーションの困難が少ない群の存在が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to clarify individual differences in verbal communication in children with ASD as a starting point for developing a support method modeling ASD children with better communication. As a result, attempted classification of characteristics using Multi-dimensional Scale for PDD and ADHD (MSPA), it was possible to classify children with ASD diagnosis into 3 groups. In addition, as a result of attempted classification of characteristics using the Japanese version of The Children's Communication Checklist Second Edition (CCC-2), it can be classified into 4 groups, and the results shows that there are a group with relatively few communication difficulties.

研究分野：発達心理学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 言語コミュニケーション 個人差

1. 研究開始当初の背景

2012年の文科省の調査によると、通常学級に在籍していて、知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難を持っている児童生徒の割合が全体で6.5%と報告されている。これは40人学級ひとクラスに2-3人は発達障害の可能性のある児童生徒がいる計算になる。この中で、「学習面の困難」を抱えているのが学習障害(LD)、「行動面の困難」の中で「不注意または多動性・衝動性に著しい問題」を抱えているのが注意欠如・多動性障害(ADHD)に該当し、「対人関係やこだわり等」に著しい問題を抱えているのが、自閉症スペクトラム障害(以下、ASD)に該当するとされており、ASDの児童生徒はおよそ1.1%いると推定される。しかし、まだその支援方法は確立されていない。

ASDのある人は、言語コミュニケーションにおいて困難が生じるとされている。例えば、比喩や皮肉といった「文字通りでないことば(nonliteral language)」の理解が困難であることが知られている(Happé, 1993, 1994)。このように、従来の研究では、定型発達児者と比較して、できない部分(deficit)を示す研究が中心であった。そして、臨床的な介入では、コミュニケーションに困難を持つ個人の社会的知識を強化することに焦点があてられるが、十分な社会的知識を獲得したとしてもより柔軟に適切な行動へと変換するのが難しいことが指摘されていた(Begeer, et al., 2008)。

他方、ASDの人は定型発達の人よりもASDの人の行動に共感を示しやすい(Komeda, et al., 2015)という報告がある。このことは、コミュニケーションの支援において、適切な行動への変換が難しい原因のひとつとして、これまでの支援は定型発達児者をモデルとして進められてきたことにある可能性を示唆している。すなわち、ASDの中でも、よりコミュニケーションが上手な人をモデルとすることで、適切な行動への変換が容易となるような支援が可能となるのではないかと考えられる。

ASDにおけるコミュニケーションの困難の程度には個人差があり、こうした個人差に焦点を当てた研究は少ないのが現状ではあるが、一人一人のニーズに応じた発達支援を考える上で、個人差を明らかにしていくことは重要な研究課題であるといえる。申請者はASD児を対象とした予備的研究から、他者への情報伝達場面において、より効率よく情報を伝達できるASD児が存在することを報告している(Tamura, et al., 2015)。しかし、そのような児童の言語コミュニケーションにおいて、どのような特徴がみられるのかまでは明らかにしていないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、よりコミュニケーションの上手なASD児者をモデルとした支援方法の開

発に向けた端緒として、ASD児における言語コミュニケーションの個人差を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 発達障害の要支援度評価尺度(Multi-dimensional Scale for PDD and ADHD; MSPA)を用いた検討

コミュニケーションの困難は、日常生活のさまざまな場面において影響するが、特に学齢期の子どもにとって大きな問題となるのが学習場面である。学習に困難のある子どもたちの支援を考える上では、コミュニケーションを含めた幅広い特性について考慮する必要がある。そこでまず、発達障害の要支援度評価尺度(Multi-dimensional Scale for PDD and ADHD; 以下、MSPA)を用いて学習に困難のある子どもの特性の分類を試みた。

MSPAは、発達障害の特性について、「コミュニケーション」「集団適応力」「共感性」「こだわり」「感覚」「反復運動」、「粗大運動」「微細協調運動」「不注意」「多動性」「衝動性」「睡眠リズム」「学習」「言語発達歴」の14項目から評価し、1~5まで0.5間隔の9段階で特性の程度と要支援度を数値化する尺度である(Funabiki, et al., 2011)。2.5より高い場合、その特性は要支援と考えられる。各項目は本人や保護者との面談を通して評価し、各項目の結果をレーダーチャートに示すことで、発達障害の特性や支援が必要なポイントを視覚的にとらえられるようになっている。

対象 学習に困難のある小学2年生~高校1年生までの子ども18名(平均年齢11.1±2.6歳)を対象にMSPAの評定を実施した。診断名の内訳は、ASDのみが10名、ASDとADHDの併存が3名、ASD+LDの併存が1名、ASD+ADHD+LDの併存が1名、LDのみが2名、診断のない者が1名であった。

手続き 学習の個別支援担当者が本人および保護者との面談を通して発達・生活歴を聴取し、評定した。

(2) 日本版CCC-2「子どものコミュニケーション・チェックリスト」を用いた検討

次に、ASD児における言語コミュニケーションの個人差をより詳細に検討するため、日本版CCC-2「子どものコミュニケーション・チェックリスト」を用いて特性の分類を試みた。

CCC-2は、日常場面における子どもの言語コミュニケーション能力について、音声、文法、意味、首尾一貫性、場面に不適切な話し方、定型化されたことば、文脈の利用、非言語的コミュニケーション、社会的関係、興味関心の10領域から包括的に評価するツールである(大井ほか, 2016)。1領域あたり7も項目の計70問の質問によって構成されてい

る。各質問にあるような行動が、どのくらいの頻度で見られるかを、0. 週に1回以下(もしくは全くない)、1. 週に数回はあがるが、毎日ではない、2. 日に1, 2回、3. 日に数回(3回以上)の中から判断してもらうようになっている。

対象 ASDのある7~18歳(平均年齢14.9±2.4歳)の子どもを持つ保護者20名を対象とした。

手続き 保護者に直接もしくは郵送にて配布して記入を依頼し、その場もしくは後日回収した。

4. 研究成果

(1) 評定項目のうち「学習」をのぞく13項目の評定値をもとに、クラスター分析を行った後、各クラスターの特徴を検討した。クラスター分析の結果から、4つのクラスターに分類した。クラスターごとの各特性の平均評定値をMSPAのレーダーチャートに示したものが図1である。

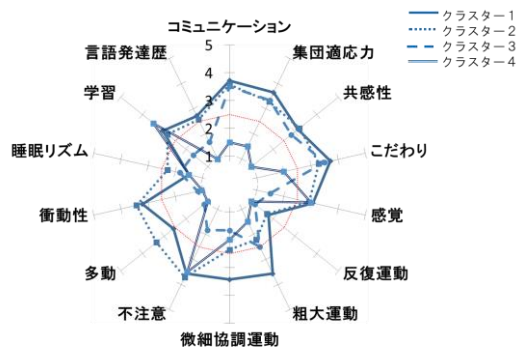


図1. クラスターごとの各特性の平均評定値

各クラスターの特徴は以下の通りであった。

クラスター1 18名中7名が該当した。「コミュニケーション」「集団適応力」「こだわり」「感覚」「粗大運動」「微細協調運動」の要支援度が他のクラスターよりも高かった。要支援度の高い項目が多く、特に、ASD特性に加えて運動特性に配慮した支援が必要な群であると考えられる。

クラスター2 18名中7名が該当した。「共感性」「不注意」「多動性」「衝動性」の要支援度が他のクラスターよりも高かった。ASD特性に加えてADHD特性に配慮した支援が必要な群であると考えられる。

クラスター3 18名中3名が該当した。「コミュニケーション」「集団適応力」「共感性」「こだわり」以外の特性は要支援度が低かった。主にASD特性に配慮した支援が必要な群であると考えられる。

クラスター4 18名中1名が該当した。他のクラスターに比べて、「コミュニケーション

ン」「集団適応力」「共感性」「こだわり」の要支援度が低かった。「学習」の要支援度が最も高く、不注意に配慮した支援が必要なタイプであると考えられる。

なお、4つのクラスターのうち、ASDの診断のある子どもは、クラスター1~3に分類された。同じ診断名であっても、より特性が似ているタイプ同士の方が共感しやすく、モデルになりやすいと考えられる。診断名ではなく特性による個人差を明らかにすることで、より個別のニーズに合った支援方法の開発につながる事が期待される。

(2) 10領域の評定値をもとに、クラスター分析を行い、各クラスターの特徴を検討した。クラスター分析の結果から、4つのクラスターに分類した。クラスターごとの各領域の平均評定値を図2に示した。

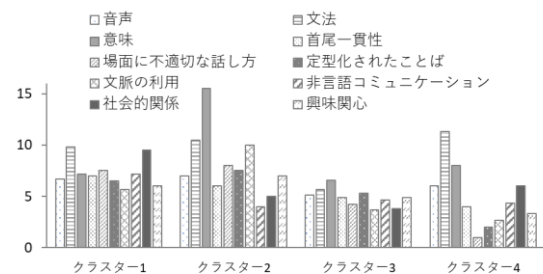


図2. クラスターごとの各領域の平均評定値

各クラスターの特徴は以下の通りであった。

クラスター1 20名中6名が該当した。「社会的関係」の評定値が他のクラスターよりも高かった。この領域は、「悪気はないのに、他の子どもを傷つけるようなことをしたり、おこらせるようなことを言ったりしてしまう。」などの項目がある。ASDで困難がみられやすい特性であるとされているが、比較的困難が少ない群であると考えられる。

クラスター2 20名中2名が該当した。「意味」「文脈の利用」の評定値が他のクラスターよりも高かった。「意味」の領域は、「目に見えることよりも、概念を表す抽象的な語(「知識」「政治」「勇気」など)を使う。」などの項目があり、「文脈の利用」の領域には「皮肉っぽいユーモアがわかる。」などの項目がある。言語の構造的側面とコミュニケーションの語用的側面の両方において、比較的コミュニケーションが良好な群であると考えられる。

クラスター3 20名中9名が該当した。「文法」が他のクラスターよりも低かった。この領域は、「過去形の「た」が使えない。例えば、「先週スキーに行った」と言うべきところを「先週スキーに行く」と言う。」などの項目がある。この特徴は特異的言語発達障害(SLI)の子どもにしばしばみられると

され、言語の構造的側面の問題が生じやすい群と考えられる。

クラスター4 20名中3名が該当した。「場面に不適切な話し方」「定型化されたことば」の評価点が他のクラスターよりも低かった。「場面に不適切な話し方」の領域は、「だれも興味をもたないようなことをくり返ししゃべる。」などの項目があり、「定型化されたことば」では「他の人が言ったばかりのことをくり返す。」などの項目がある。コミュニケーションの中でも語用的側面の問題が生じやすい群と考えられる。

以上のように、同じASDという診断をもつ子どもたちの中でもコミュニケーションの特徴が多様であることが示された。その中で、「社会的関係」「意味」「文脈の利用」などの領域が比較的高く、コミュニケーションの困難が少ない群の存在が明らかになった。

<引用文献>

- Begeer, S., Banerjee, R., Lunenburg, P., Terwogt, M. M., Stegge, H., & Rieffe, C. (2008). Brief report: Self-presentation of children with autism spectrum disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 38, 1187-1191.
- Funabiki, Y., Kawagishi, H., Uwatoko, T., Yoshimura, S., & Murai, T. (2011). Development of a multi-dimensional scale for PDD and ADHD. *Research in developmental disabilities*, 32, 995-1003.
- Happé, F. G. (1993). Communicative competence and theory of mind in autism: A test of relevance theory. *Cognition*, 48, 101-119.
- Happé, F. G. (1994). An advanced test of theory of mind: Understanding of story characters' thoughts and feelings by able autistic, mentally handicapped, and normal children and adults. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 24, 129-154.
- Komeda, H., Kosaka, H., Saito, D. N., Mano, Y., Jung, M., Fujii, T., Yanaka, H. T., Munesue, T., Ishitobi, M., Sato, M., & Okazawa, H. (2015). Autistic empathy toward autistic others. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 10, 145-152.
- 大井学・藤野博・槻館尚武・神尾陽子・権藤桂子・松井智子 (2016). 「日本語版 CCC-2 子どものコミュニケーション・チェックリスト マニュアル」 日本文化科学社
- Tamura, A., Tsunemi, K., Ogawa, S., Yoshikawa, S., & Masataka, N. (2015). Referential communication of children with autism spectrum disorder. *JSLIS 2015 Conference Handbook*, pp.166-167.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

- ① 田村綾菜・小川詩乃・船曳康子・正高信男・吉川左紀子, 発達障害の要支援度評価尺度 (MSPA) を用いた学習に困難のある児童生徒の特性分類の試み, 日本心理学会第 81 回大会, ポスター発表, 2017 年 9 月 22 日, 久留米シティプラザ (福岡県・久留米市)
- ② 田村綾菜, 発達障害児・者に対する支援, 日本心理学会第 81 回大会, 公募シンポジウム (SS-098 「社会性の起源と支援: 比較認知科学、社会認知神経科学、発達心理学に基づく学際的アプローチ」) 話題提供, 2017 年 9 月 22 日, 久留米シティプラザ (福岡県・久留米市)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田村 綾菜 (TAMURA, Ayana)
京都大学こころの未来研究センター・
研究員
研究者番号: 70617258